

【審査論文】

保育者が気になる幼児の行動と身体感覚の育ちとの関連性

前田泰弘

The relevance between the activities and the deviations in body senses of preschool children about which childcare workers are worried

Yasuhiro MAEDA

要旨

保育所（園）や幼稚園では「気が散りやすい」、「通りすがりに他児を叩く」、「姿勢を保てない」など気になる行動を示す児への対応が課題となっている。近年これらの行動は児の身体感覚の偏りが背景にある可能性があること、さらに身体感覚を意識した個別的な保育を重ねることで偏りが改善されることが報告されてきた。しかし、これらの知見を日常の保育に反映するためには集団での保育場面における気になる児の行動と身体感覚の偏りの現状と関連性について検証する必要がある。本研究では、保育所（園）に通う5歳児のうち保育士が気になると感じる児について、その行動と身体感覚の偏りの状況との関連性について検討した。その結果、保育士が気になると感じる児ではそうでない児に比して、身体感覚の多くの領域で偏りが見られることや気になる行動が多いことが分かった。また、気になる行動は関連する身体感覚領域の偏りで説明できることが分かった。今後、保育士が児の身体感覚を意識した保育を立案・実施する上での資料を収集することができたと考えられた。

キーワード：身体感覚(body sense)・保育士(childcare worker)・発達障害(developmental disorders)・幼児(preschool children)

I. はじめに

近年、保育所（園）や幼稚園では「気になる行動」を示す児への対応が喫緊の課題となっている。保育において特別な援助や配慮が必要な児の多くは、従前であれば「3歳になったが未だ一語文である」、「担任の先生の名前をなかなか覚えられない」、「2歳を過ぎて未だ始歩がない」、「友達に興味を示さない、関わり方が幼い」など、知的発達・運動発達・社会性の発達のいわゆる発達の三つの評価領域の遅れや領域間の偏りなどとの関連から援助がなされてきた。一方で、近年保育士が理解や対応に苦慮する児の行動としては、「姿勢を保つことが難しい」、「気が散りやすい」、「通りすがりに友達を押す」、「会話が噛み合わないことがある」など、発達の三つの評価領域のみでは十分な説明が難しい内容が増えており、いわゆる「気になる行動」として対応に苦慮しているという状況がある。筆者は、これまでの研究においてこのような気になる行動の背景には、身体感覚の偏りがある可能性があることを報告してきた¹⁾。ここで言う身体感覚とは、児の環界にある情報を取り入れる（感じ取る）ための感覚、すなわち五感と呼ばれる聴覚、視覚、触覚、味覚、嗅覚と、身体の均衡性の保持や身体部位への力の抜入など、身体の動きや姿勢を作るために

必要な体性感覚（前庭感覚や固有受容覚など）を指している。身体感覚の偏りは主に敏感さと鈍感さとして表現されるが、たとえば五感のひとつである聴覚が敏感であると、音全般や特定の音が過剰に輸入されるために、児は保育場面において音に対して耳を塞いだり、ざわざわした場面から逃避するなどその刺激を嫌がるような行動を見せることがある。また、視覚が敏感であると、視野に入る刺激の多くに注意が転導してしまい、結果として注意集中が続かなかったり、気が散りやすいなどの状況を導くことがある。これとは反対に、聴覚に鈍感さが認められる場合には、自分に向けて話されていることに気づかなかったり、理解が不十分になり会話が噛み合わないことがある。また、触覚に鈍感さがある児の場合には、刺激を感じるための強い刺激を欲することにより、たとえば高いところから飛び降りることを好んだり、強い力で友達にかかわったりすることがある。一方、体性感覚のうちバランスやスピードの感受に関連する前庭感覚に偏りがある場合には、姿勢をまっすぐに保つことが難しかったり、ブランコで揺られることを怖がったりする。また、力のコントロールや身体部位の協調運動に関連する固有受容覚に偏りがある場合には、適度な力で環界に関わることが難しかったり、ぎこちない動き、不器用な動きを呈することとなる²⁾。

このような身体感覚の改善を促すための取り組みとしては、これまで作業療法の分野を中心にした感覚統合法³⁾や特別支援教育の分野におけるムーブメント教育・療法⁴⁾などが行われてきた。これらは身体感覚を利用した運動を訓練や教育の中でプログラムとして行うことにより児の身体感覚の改善を図るもので、これまで多くの取り組みがなされ効果をあげている。一方で、これらの取り組みを行うためには専門的なトレーニングや教育を受ける必要があること、また、取り組みのための環境設定の必要性などの面から、保育や幼児教育の場面で取り入れられる機会が少ない現状があった。このような状況を鑑み、近年、筆者は保育士が日常の保育で用いている技能を用いて、子どもに身体感覚の経験を保障できる保育方法の開発に取り組んできた。たとえば、その取り組みのひとつが、自然環境を用いた野外での保育活動である⁵⁾。この活動では保育所（園）や幼稚園での適応に困難を示す気になる児を対象に、自然環境のなかでの保育士との個別的なかわりを通じて直接体験を重ねるという活動である。具体的には山の斜面の上り下りを繰り返すことで、身体部位の力の入れ方や運動の協調を経験したり（固有受容覚の経験）、不整地を歩くことでバランスよく歩行する（前庭感覚の経験）などである。この直接体験を通じてさまざまな身体感覚を利用する機会を保障することで、たとえば、触覚や聴覚の過敏により環境への接近も難しかった児が、環境への興味・関心を拡げて接近することで状況が把握できるようになり、それとのやりとりが可能になったり⁶⁾、多動で衝動的な行動を繰り返していた児が自らの身体をコントロールできるようになり、その結果、かかわる保育士の動きをモデルとして模倣できるようになった⁷⁾などの成果が見られた。このように野外での保育活動ではこのように身体感覚を意識した活動、動きづくりを行うことで、気になる児の身体感覚の改善、向上とともに生活の質が高まる事例を複数経験してきた^{8) 9) 10)}。

このような経緯から、身体感覚を日常的かつ継続的に利用することが、児の身体感覚の向上、改善にとって大切であると考えられた。ここで得られた知見を日常の保育に利用するためには、集団の保育場面で見られる気になる児が同様の身体感覚の偏りを示していることや、その偏りが気になる行動と関連性があることを検証する必要があった。また、加えて保育士自身が児の身体感覚の偏りをより簡便に評価できる指標が開発されることが望まれる。本研究では、これらの課題のうち、集団での保育を行う保育所に在籍する児とクラス担任の保育士を対象に、(1) 保育士が気になると感じる児の身体感覚の状況、(2) 保育士が感じる気になる行動の状況、(3) 気になる行動と身体感覚の偏りの関連性、について検討することを目的とした。

II. 対象と方法

対象はA県の保育園7園に在籍する5歳児（生活年齢：5歳0ヶ月齢～5歳11ヶ月齢）99名（男児49名・女児50名）と、そのクラスを担当する保育士である。

まず、クラスの担当保育士（以下、担当保育士）に、クラス児全員の身体感覚の状況を尋ねる質問紙（日本感覚インベントリー、以下JSI-R¹¹⁾への記入を依頼した。JSI-Rとは、4歳から6歳の幼児の身体感覚の状態を評価するスケールである。前庭感覚、触覚、固有受容覚、聴覚、視覚、嗅覚、味覚、その他の感覚を反映すると考えられる行動項目（146項目・表1）の発現状況について、いつもある（4点）・頻繁にある（3点）・時々ある（2点）・ごくたまにある（1点）・まったくない（0点）の5段階で回答し、それぞれの感覚領域ごとに集計した合計点ならびに全領域の総合計点をもとに感覚の状態を評価するものである。

また、担当保育士には、クラス全児についてそれぞれの児に見られる気になる行動をチェックリストから選ぶとともに、日常の様子から気になる子・少し気になる子・気にならない子のいずれに当てはまるか回答するよう依頼した。なお、チェックリストは筆者がこれまでの保育所（園）や幼稚園の巡回相談で得られた気になる行動をもとに、特に身体感覚の偏りを反映していると考えられる39の行動を抽出して整理したものである（表2）。

本調査の期間は、20xx年12月から20xx+1年7月であった。本研究の実施にあたっては、研究の目的と手続き、分析方法等について各保育園の施設長および保育士に口頭と文書で説明し同意を得ている。また、データの取り扱いについて、個人が特定されない形で集計されることを口頭と文書で説明し、同意を得ている。

表1 JSI-Rの設問（各感覚領域を反映すると考えられる行動項目）の例

前庭感覚	ブランコなど揺れる遊具を怖がる。 床のうえに、ごろごろと寝転んでいることが多い。
固有受容覚	おもちゃなどの物の扱いが非常に雑で、よく壊すこともある。 積み重ねられた布団やマットの間に入りこんでいることがある。
触覚	体に触られることに非常に敏感である。 靴下、手袋、マフラー、帽子などを身につけたがらない。
聴覚	人混みや、うるさい場所を嫌う。 音が聞こえる方向が分からない。または、混乱しやすい。
視覚	いろいろな物が見えると、気が散りやすくなる。 探し物をうまく見つけられない。
嗅覚	刺激の強い味を好む。 偏食がある。
その他	日中、おもらしをすることがある。 貧乏ゆすりをすることが多い。

表2 気になる行動のチェックリストの項目

姿勢が崩れやすい（保てない）	他児に触り続ける	集中して話を聞けない
走り方が不安定	抱っこされることを好む	注意されることが苦手
寝転んだり寄りかかることが多い	午睡でなかなか寝つけない	幼児音（発音）がある
しばしばぼんやりしている	靴を左右逆に履くことが多い	勝ちや一番にこだわる
動作がゆっくりである	砂遊びや泥遊びを嫌がる	失敗すると気持ちが崩れる
午睡の寝起きが悪い	質問と答えが噛み合わない	食べこぼしが多い
箸やハサミがうまく使えない	耳ふさぎをする	友達を否定する（「嫌い」「やめて」など）
身体（動き）に力がはいらぬ	騒がしい場では落ち着かない	環境の変化に弱い
身体を動かす遊びが苦手	呼ばれても返事をしないことがある	他児に威圧的
声が大きいかまたは小さい	一斉（集団）の声がけを理解できない	要求が通らぬと不安定になる
行動が雑	気が散りやすい	自信がない（手伝いを求める）
高い所から飛ぶことを好む	遊びや興味が転々と変わる	他者の要求を受け入れぬ（主張が強い）
他児を叩く	気持ちの切替が難しい	場に合ぬふざけが目立つ

Ⅲ. 分 析

(1) 気になる児の身体感覚の状況

保育士が気になると感じる児の身体感覚の状況を分析した。担当保育士により回答されたJSI-Rの総合点および各身体感覚領域の集計結果を算出した上で、この結果を担当保育士により回答された気になる児の群（以下気になる群）、少し気になる児の群（以下少し気になる群）、気にならない児の群（以下気にならない群）に分類し統計的に差を比較した。

(2) 保育士が感じる気になる行動

気になる行動のチェックリストから得られた回答をもとに、保育士が感じる気になる行動の発現の状態を整理し、気になる群、少し気になる群、気にならない群の各群間で比較した。

(3) 気になる行動と身体感覚の偏りとの関連

児全体について、JSI-Rの各感覚領域の得点と気になる行動の発現との関連について相関分析を行い、身体感覚の偏りと発現する気になる行動の関係について検討した。また、各感覚領域間の得点の関連性についても相関分析を行った。

Ⅳ. 結 果

(1) 気になる児の身体感覚の状況

日常の気になる様子から保育士が児を分類した結果、気になる群は32名（男児22名、女児10名）であった。また、少し気になる群は25名（男児13名、女児12名）、気にならない群は42名（男児14名、女児28名）であった。

JSI-Rの得点の平均を各群で集計した結果を以下に示す（気になる群、少し気になる群、気にならない群の順に示す）。なお、群間の差を検討するため一元配置の分散分析を行った。得点が高いほど身体感覚の偏りが大きいことを示しているが、総合点は83.12（SD=51.35）、22.04（SD=18.23）、12.64（SD=18.00）であり、群間に有意差が認められた（ $F(2, 96)=45.917, p<.01$ ）。また、前庭感覚は18.22（SD=13.53）、6.00（SD=6.86）、3.19（SD=5.79）であり、群間に有意差があった（ $F(2, 96)=25.568, p<.01$ ）。触覚は、19.34（SD=13.90）、3.96（SD=3.67）、2.50（SD=4.88）で群間に有意差があった

($F(2, 96) = 38.119, p < .01$)。固有受容覚は、5.91 (SD=5.35)、0.80 (SD=1.32)、0.64 (SD=1.41) で群間に有意差があった ($F(2, 96) = 27.834, p < .01$)。聴覚は、10.31 (SD=7.53)、3.44 (SD=4.60)、1.83 (SD=3.45) で群間に有意差があった ($F(2, 96) = 24.133, p < .01$)、視覚は、10.22 (SD=9.31)、2.00 (SD=3.32)、0.64 (SD=1.46) であり群間に有意差があった ($F(2, 96) = 32.265, p < .01$)。なお、以上の領域の群間の有意差についてFisherの最小有意差法による多重比較を行った結果、すべて気になる群が少し気になる群、気にならない群に対して得点が高い ($p < .01$) という結果になった。また、少し気になる群と気にならない群間に有意差はなかった。味覚は、2.41 (SD=4.29)、0.88 (SD=2.24)、0.93 (SD=2.11) で、気になる群が気にならない群より有意 ($p < .05$) に得点が高かった。嗅覚では群間に有意差はなかった。

(2) 保育士が感じる気になる行動

保育士が感じる気になる行動の発現数について、気になる群、少し気になる群、気にならない群で比較した。気になる群の児32名が示す気になる行動の合計は370件 (Avg.=11.56, SD=5.97, range=1-24)、少し気になる群の児25名の合計は90件 (Avg.=3.60, SD=1.91, range=0-9)、気にならない群の児42名の合計は77件 (Avg.=1.83, SD=2.95, range=0-16) であった。気になる行動の発現数の群間差について一元配置の分散分析により検定したところ、群間に有意な差が認められた ($F(2, 96) = 56.77, p < .01$)。Fisherの最小有意差法による多重比較の結果、気になる群の児が示す気になる行動の発現数は、他のすべての群に比較して有意 ($p < .01$) に多かった。一方、少し気になる群、気にならない群の児が示す気になる行動の発現数には有意な差は認められなかった。

(3) 気になる行動と身体感覚の偏りとの関連

すべての子(群)を対象として、JSI-Rの各感覚領域のスコアの高さ(偏りの大きさ)と気になる行動の発現との関連について相関分析を行った(表3)。まず、前庭感覚のスコアの高さと関連する気になる行動としては、寝ころぶ寄りかかる ($r = .63, < .001$)、気が散りやすい ($r = 0.58, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.55, < .001$)、行動が雑 ($r = 0.55, < .001$)、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.54, < .001$)、姿勢が崩れる ($r = 0.53, < .001$) などとの相関が高かった。また、固有受容覚では、他児を叩く ($r = 0.69, < .001$)、高いところから飛ぶ ($r = 0.66, < .001$)、行動が雑 ($r = 0.62, < .001$)、気が散りやすい ($r = 0.61, < .001$)、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.60, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.60, < .001$) などとの相関が高かった。触覚では、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.68, < .001$)、気が散りやすい ($r = 0.64, < .001$)、行動が雑 ($r = 0.58, < .001$)、寝ころぶ寄りかかる ($r = 0.57, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.57, < .001$)、他児を叩く ($r = 0.55, < .001$) など、聴覚では、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.73, < .001$)、気が散りやすい ($r = 0.68, < .001$)、耳ふさぎをする ($r = 0.62, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.61, < .001$)、寝ころぶ寄りかかる ($r = 0.57, < .001$)、姿勢が崩れる ($r = 0.55, < .001$) など、視覚では、気が散りやすい ($r = 0.67, < .001$)、寝ころぶ寄りかかる ($r = 0.65, < .001$)、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.63, < .001$)、姿勢が崩れる ($r = 0.62, < .001$)、行動が雑 ($r = 0.60, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.59, < .001$) などとの相関が高かった。すべての感覚領域のスコアの総合から特定の感覚での説明が難しい行動を評価した「その他」領域のスコアを除いたものとの関連では、騒がしいと落ち着かない ($r = 0.69, < .001$)、気が散りやすい ($r = 0.69, < .001$)、寝ころぶ寄りかかる ($r = 0.65, < .001$)、集中して話を聞けない ($r = 0.62, < .001$)、行動が雑 ($r = 0.60, < .001$)、姿勢が崩れる ($r = 0.59, < .001$)

などとの相関が高かった。また、各感覚領域間でのJSI-Rのスコアは、前庭感覚と視覚 ($r=0.86$, $<.001$)、触覚と視覚 ($r=0.85$, $<.001$)、聴覚と視覚 ($r=0.85$, $<.001$) をはじめとして多くの領域間で高い相関性を示していた (表4)。

なお、JSI-Rの総合得点と気になる行動の発現数について、全児を対象に相関を検討した結果、有意に高い相関性 ($r=0.86$, $<.001$) が認められた。

表3 JSI-Rの各領域と相関の高い気になる行動

前庭感覚	固有受容覚	触覚
寝ころぶ寄りかかる ($r=0.63$)	他児を叩く ($r=0.69$)	騒がしいと落ち着かない ($r=0.68$)
気が散りやすい ($r=0.58$)	高いところから飛ぶ ($r=0.66$)	気が散りやすい ($r=0.64$)
集中して話を聞けない ($r=0.55$)	行動が雑 ($r=0.62$)	行動が雑 ($r=0.58$)
行動が雑 ($r=0.55$)	気が散りやすい ($r=0.61$)	寝ころぶ寄りかかる ($r=0.57$)
騒がしいと落ち着かない ($r=0.54$)	騒がしいと落ち着かない ($r=0.60$)	集中して話を聞けない ($r=0.57$)
姿勢が崩れる ($r=0.53$)	集中して話を聞けない ($r=0.60$)	他児を叩く ($r=0.55$)
聴覚	視覚	総合-その他
騒がしいと落ち着かない ($r=0.73$)	気が散りやすい ($r=0.67$)	騒がしいと落ち着かない ($r=0.69$)
気が散りやすい ($r=0.68$)	寝ころぶ寄りかかる ($r=0.65$)	気が散りやすい ($r=0.69$)
耳ふさぎをする ($r=0.62$)	騒がしいと落ち着かない ($r=0.63$)	寝ころぶ寄りかかる ($r=0.65$)
集中して話を聞けない ($r=0.61$)	姿勢が崩れる ($r=0.62$)	集中して話を聞けない ($r=0.62$)
寝ころぶ寄りかかる ($r=0.57$)	行動が雑 ($r=0.60$)	行動が雑 ($r=0.60$)
姿勢が崩れる ($r=0.55$)	集中して話を聞けない ($r=0.59$)	姿勢が崩れる ($r=0.59$)

表4 各感覚領域間でのJSI-Rのスコアの相関

	前庭感覚	触覚	固有受容覚	聴覚	視覚	嗅覚	味覚
前庭感覚	1.00	0.84**	0.59**	0.76**	0.86**	0.44**	0.48**
触覚		1.00	0.71**	0.76**	0.85**	0.45**	0.49**
固有受容覚			1.00	0.58**	0.59**	0.37**	0.25*
聴覚				1.00	0.85**	0.26**	0.5**
視覚					1.00	0.31**	0.46**
嗅覚						1.00	0.15
味覚							1.00

**p < 0.01, *p < 0.05

V. 考察

本研究ではまず、保育士が気になると感じる児の身体感覚の状態について検討を行った。これまで行われてきた気になる児に対する個別保育の研究では、多くの児が身体感覚の状態に偏りを示していた^{たとえば7) 8) 9) 10)}。本研究の結果、集団の保育場面において保育士が気になると感じる5歳児についても身体感覚の状態に偏りを示すことが分かった。このことは、集団の保育場面で気になる児についても、保育士が身体感覚を意識した保育を行いその改善や向上を図ることにより、個別保育で見られた効果^{8) 9) 10)}と同様に、児の集団生活への適応や生活の質が高まる可能性があることを指摘するものであった。なお、従来の研究で対象となった気になる児には、広汎性発達障害などいわゆる発達障害の診断を受けている児

も含まれていた^{たとえば8)}。また、発達障害児と身体感覚の関係を扱った研究では、広汎性発達障害の幼児の多くでは、聴覚や触覚、視覚などの感覚刺激に対して過敏あるいは鈍麻な反応を示す¹²⁾ことや、注意欠陥・多動性障害の児では、視覚刺激に対する過敏な応答反応¹³⁾や体性感覚系の異常¹⁴⁾を示すことが報告されていることから、気になる児の中でも身体感覚の偏りが顕著な事例では発達障害との関連性を検討することが必要になる場合もあると考えられた。その一方で、発達障害やその傾向のある児の早期発見の現状については、従来の母子保健法で定められた乳幼児健康診査で十分にスクリーニングされないことが報告されている¹⁵⁾。そのような背景もあり、保育の現場では、気になる行動を示す児について乳幼児健康診査での評価や助言を期待し児の受診結果を待つことがあるが、児が何らの指摘も受けずに健康診査を通過することがあり、保育士と保護者の間で児の姿の共有に苦慮する現状がある¹⁾。しかし、本研究結果に示された気になる児の身体感覚特性や、その特性が刺激の多い集団生活の中で顕在化しやすい可能性があることを保育士が知ることで、集団のなかでの児の特性を理解することができ、保育環境を設定することや保護者との情報共有をより効果的に進めていくことが可能になると考えられた。

気になる行動と身体感覚の偏りの関連性では、その行動数と身体感覚の偏りのスコアとの間に強い相関性が認められた。このことから、今回のチェックリストにあげられた気になる行動は身体感覚の偏りが起因となっていることが示唆された。また、結果で見られた気になる行動と偏りとの具体的な関連としては、前庭感覚の偏りに対しては身体の均衡性の拙劣さにかかわる項目、固有受容覚の偏りに対しては圧力の欲求を満たす項目や運動協調の拙劣さに関する項目、聴覚の偏りでは、聴覚刺激の入力からの忌避や刺激処理の拙劣さ、注意保持の困難などと高い相関があった。さらに、触覚の偏りに対しては触覚刺激の欲求を満たす項目と高い相関があるなど、それぞれの身体感覚領域のもつ特殊性に応じた行動との強い関連性が認められていた。一方で、JSI-Rの総合点からその他を除いたスコアの高さと相関性が高い気になる行動は、他のほとんどの感覚領域の偏りとも相関性が高いという結果があった。これはそれぞれの身体感覚の特殊性と直接的に因果関係を説明することが難しい行動についても関連性が高い結果が得られていたことを表している。この点については、日常生活を顧みても、行動一般が単一の感覚モダリティの機能だけを用いて行われているわけではない、ということから説明ができよう。たとえば、視覚を用いてモノを見ている時は、聴覚からの音の知覚が鈍麻になったり、視聴覚に集中すると前庭感覚や固有受容覚が鈍麻になり姿勢が崩れるといったように、ある感覚の利用が他の感覚の機能を低下させるということがある。また、反対に姿勢を正すと視聴覚の情報が入りやすくなるといったように、ある感覚の利用が他の感覚の機能を賦活させることもある。したがって、気になる行動は複数の感覚のモダリティ間の相補的働きや排他的働きにも影響を受けている側面があると考えるのが妥当と考えられた。

本研究は、集団での保育において気になる行動を示す児について、その行動の背景を整理すること、さらにその背景を保育者が簡便かつ客観的に評価できる手法を開発することの一部に位置づけられているが、その点では、今回使用したチェックリストは気になる行動を示す児の身体感覚の偏りを客観的に評価する上で有効な指標になると考えられた。しかし、気になる行動と身体感覚領域とのより精細な関連性を明らかにするためには、気になる行動の発現に影響を与えている身体感覚領域間の負荷量や、他の身体感覚間との相補性や排他性をさらに検討していくことが必要であると考えられた。また、それぞれの身体感覚に対応した特殊感覚機能検査の結果との検証も必要であろう。一方で、身体感覚領域の固有の機能（特殊性）の偏りが気になる行動に反映される結果も示されていることから、日常の保育では感覚の偏りの大きさに応じた配慮をすることが必要であると考えられる。たとえば、五感の入力の偏りがある児に対しては、その刺激を増減できる環境設定や働きかけをしたり、体性感覚に偏りがある児に対しては、動きづく

りや外遊びなどを通じて自発的にそれらの感覚を経験できる機会を保障することで、その向上や改善をねらうことが大切であると考えられた。

VI. 結 論

保育場面において気になる児には、身体感覚の偏りが大きいことが分かった。また、このことは気になる行動の多くが身体感覚の偏りから説明できることを示唆するものであった。気になる行動とJSI-Rの得点との関連では、5歳児の気になる行動は身体感覚の偏りにより各感覚がもつ特殊性（たとえば前庭感覚であれば均衡性）の拙劣さが現れることに加え、五感を通じた周囲の環境からの刺激入力によって、感覚本来の賦活が低下することにより発現する可能性があると考えられた。また、このことは5歳児の気になる行動は客観的に評価した身体感覚の状態と関連づけて説明できる可能性を示した。従来、感覚刺激の入力処理の拙劣さは、環境の調整を主として行い、体性感覚の偏りによる運動出力の拙劣さは動きづくり等によりその向上をねらうことが有効であると示されてきた。本研究の結果がより多くの事例によって精査されることにより、気になる行動と身体感覚の関連をより詳しく説明できる可能性があり、今後の課題となるところであった。

付 記

本研究はJSPS科研費（課題番号25350941「幼児の身体感覚を育てる保育方法の開発」）（研究代表者前田泰弘）の助成を受けて行われた。また、本研究の一部は日本特殊教育学会第52回大会で発表されたものである。

引用文献

- 1) 前田泰弘 (2007). 軽度発達障害の特徴を示す幼児への発達支援. 東北福祉大学研究紀要, 31, p. 253-260.
- 2) 木村順 (2006). 育てにくい子にはわけがある. 大月書店.
- 3) A. Jean Ayres (1990). 子どもの発達と感覚統合. 佐藤剛監訳. 共同医書出版.
- 4) M. Frostig (1984). ムーブメント教育MGLプログラム. 小林芳文訳. 日本文化科学社.
- 5) 前田泰弘・小笠原明子 (2009). 野外保育による発達が気になる幼児の「育ち」の支援. 東北福祉大学研究紀要, 33, p. 407-417.
- 6) 前田泰弘・小笠原明子 (2009). 野外保育による幼児の身体感覚の改善がQOL向上に及ぼす効果. 日本発育発達学会第7回発表論文集.
- 7) 前田泰弘・小笠原明子 (2008). 発達障害の特徴を有する幼児への野外保育の効果(4). 日本特殊教育学会第46回大会発表論文集.
- 8) 小笠原明子・前田泰弘 (2008). 発達障害の特徴を有する幼児への野外保育の効果 (1). 日本保育学会第61回大会発表論文集.
- 9) 前田泰弘・小笠原明子 (2008). 発達障害の特徴を有する幼児への野外保育の効果 (2). 日本保育学会第61回大会発表論文集.
- 10) 小笠原明子・前田泰弘 (2008). 発達障害の特徴を有する幼児への野外保育の効果(3). 日本特殊教育学会第46回大会発表論文集.
- 11) 太田篤志・土田玲子・宮島奈美恵 (2002). 感覚発達チェックリスト改訂版 (JSI-R) 標準化に関する研究. 感覚統合障害研究, 9, p. 45-63.
- 12) 川崎洋子・三島卓穂・田村みずほ・坂井和子・猪野民子・村上公子・横田圭司・水野薫・丹羽真一 (2003). 広汎性発達障害における感覚知覚異常. 発達障害研究, 25, 1, p. 31-38.
- 13) 石川道子 (2002). 軽度発達障害児の発見と対応. 障害者問題研究, 30, 2, p. 98-107.
- 14) 宮崎雅仁・藤井笑子・西條隆彦・森健治・橋本俊顕・香美祥二 (2007). 軽度発達障害 (注意欠陥多動性障害 (ADHD) / 高機能広汎性発達障害 (HFPDD) の体性感覚機能. 臨床脳波, 49, 8, p. 505-510.
- 15) 小枝達也 (2006). 軽度発達障害児に対する気づきと支援のマニュアル. 厚生労働科学研究費補助金 (子ども家庭総合研究事業) 「軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究」研究報告書. p. 5-11.

前田 泰弘 (和洋女子大学 人文社会科学系 准教授)

(2014年11月11日受付)